

# 第71回卒業証書授与式 答辞 卒業生代表 毛利優希



冬の寒さも和らぎ、春の到来を感じる季節となりました。春。いつもなら待ち遠しい、春。今年の春はどこか違うようです。卒業。この二文字が今年の春の意味を大きく変えているのだと、今この場に立ち強く感じています。私達百二十九名は、本日沢山の思い出が詰まった三刀屋高校を卒業します。ご来賓の皆様をはじめ、多くの方に臨席を賜り、このように盛大な卒業式を挙げていただきありがとうございます。心から感謝申し上げます。

「新しい仲間とともに、将来の夢や目標を現実させるために悔いのない三年間を送りたい。」これは三年前の入学式の際に、私がこの場で代表として誓ったことです。これから始まる高校生活への希望や期待で胸がいっぱいだったことを今でも覚えています。その日から今まで、三刀屋高校の総合学科ならではのキャリア教育を通して多くの経験をさせて頂き、これから自分はどうに生きるべきなのか、どのように生きたいのか、何度も考えてきました。自分自身について深く考えるという行為は、同時に他者についても考えるという行為である。私はこの三年間を通じて実感しました。なぜなら私の三年間の思い出には、全て自分以外の誰かの存在が付随しているからです。

り、人に迷惑をかけてしまうという団体競技への怖さがあったのだと思います。先輩が引退されると私は女子のキャプテンになりました。中学校の時から陸上をやっている部員がいる中で、高校から始めた自分がキャプテンをやってもよいものなのか、最初はとても不安でした。しかし、それは杞憂にすぎないとすぐに気が付きました。何の知識もない私に練習メニューのアドバイスをしてくれた仲間。どんなに辛いときも「フアイト」と全員が声を掛け合って乗り越えた練習。陸上競技は個人競技だからといって、決して孤独な競技ではありませんでした。最後の総体、二分三十二秒間絶え間なく私の耳に聞こえてきたのは、仲間の応援でした。団体競技を避けていたはずなのに、逆に仲間の存在の大切さを知った。陸上競技は個人競技ではありませんでした。他者の存在を強く認識した出来事としても一つ挙げられるのは、生徒会長という立場で臨んだ最後の三高祭です。四月、私は生徒会長に立候補するか否かすごく悩んでいました。しかし、一度きりの高校生活。後悔したくないと思いつつ、立候補することを決めました。今年の三高祭は今までの違ったものになりました。その思いのもと執行部を中心に三高祭の準備に取り掛かりました。しかし、何か特別なことをしようと思えば思うほど自分たちへの負担は増えていく一方で、日増しに楽しさよりもストレスの方が大きくなっていききました。生徒会長の自分ももっと頑張らなさい、そう強く思うが余り、私はいつしか周りが見えなくなっていました。一人でイライラし、他の執行部のメンバーに気を遣わせてしまいました。そんな自分が情けなく、不甲斐なく、生徒会長なんてやらなければよかったときえ思うようになりました。そんな自分を救ってくれたのは、その様子を外から見ていたある一人の後輩からのラインでした。「自分をよく見せようと思わずに、等身大の自分を見せればいいと思いますよ!」「優希さんには十人の執行部の皆さんもいるし、応援してくれる人もたくさんいます!」私は自分の生徒会長としての理想像に近づくために、自分がかっこよく見せようと思っていたのかもかもしれません。しかしその言葉を聞いて大切なことに気が付きました。自分以外の誰かの存在で

す。会長としての重圧に耐えられなくなった時、「みんな頑張ろう」と声を掛けてくれて、支えてくれた執行部のみんな。一人で何とかしようとしていた時に「一緒に考えよう」と夜遅くまで文化祭のタイムテーブルと一緒に考えて下さった先生。今までほとんど話したことなかった私の頼みにも、二つ返事で協力してくれた三年生のみんな。そして当日一緒に盛り上げてくれた一、二年生。全校生徒が一つになった瞬間を目にした時、生徒会長をやったよかったと心から思えました。三高祭を終えた私は当初思い描いていた理想の生徒会長とは程遠かったです。しかし当初思い描いていた生徒会長の何十倍も素敵で最高の沢山の仲間が囲まれた生徒会長でした。

私にとって忘れられないことは、部活動や学校行事だけではありません。私の高校生活は先生方の存在無くしては語れないと思っています。廊下ですれ違う一瞬の間に受験前の私の心理状態を汲み取り「肩の力抜いて行けよ」と言ってくれた先生。添削指導において忙しい時間の合間を縫っていつも全力で指導してくださる「手伝えることがあったら何でもするから」と嫌な顔一つせず向き合ってくれた先生。誰にも言えなかった悩みを放課後私が前を向けるようになるまで聞いて下さり、「お前なら大丈夫だ」と背中を押して下さった先生。自分一人では抱えきれない思いがあった時、上手いかわず途方に暮れていた姿を見た。「いつでもおいで」という先生の言葉が私の心の支えでした。私たちの表情一つ一つを見逃さず、心が折れそうになった時にはすぐに気付いて下さった先生。三刀屋高校で出会った先生方は私にとって憧れであり、私もそんな風になりたいと強く思っていました。そして今一つ伝えたい思いがあります。それは両親への感謝です。三人兄弟の末っ子の私は、一番迷惑をかけたことだと思います。精神的に弱く、大きな行事や大会、受験の前にはいつもご飯が食べられなくなるほど緊張し、弱音を吐く私を、母親はいつも「あんたなら出来るから頑張らなさい」と鼓舞してくれました。母親の厳しい言葉の裏には、確かに私への深い愛情があったことを私は知って

います。父親は仕事が忙しい時でも、私のことを第一に考え、いつも一番近くで応援してくれました。父の母校に通うことが出来て本当によかったです。両親はこれから子ども三人が離れていく事を寂しく感じている事かと思えます。でも安心してください。私たちはどんなに遠くに行っても心は繋がっています。私はお父さんとお母さんの子どもなのだと心強く感じながら、これから少しずつ恩返しをしていきます。そしていつかは必ず、お世話になった地元に帰ってきて、雲南市を、島根県を引っ張っていくような人になります。楽しみにしててください。

「新しい仲間とともに、将来の夢や目標を現実させるために悔いのない三年間を送りたい。」今では一生の仲間となったみんなと過ごしたこの三年間、私には一つの後悔もありません。三刀屋に進学した自分の選択は正しかったのだらうかと何度も考えました。しかしその度にそれを肯定出来たのは、大好きな三年生のみんなとの出会いのおかげです。みんなに会うことが私の学校に行く理由の一つとなっていました。楽しい時も、嬉しい時も、辛い時も、苦しい時も、そばにいてくれてありがとう。私は三刀屋高校の校歌が好きです。自分の青春は確かにここにあったのだと感じられる、そんな校歌が、私は好きです。おのおのが選び進みゆく今、この友情のかわることなく未来に向かって歩いていきたいと思います。辛くなったら戻ってきてまた昔みたいに語り合いたいです。きっとすぐに高校時代の私たちに戻れるはずで。

三年間良い事ばかりではなかった。上手くいかなくて、期待に応えられなくて、自分を嫌いになりそうになった時もあった。それでも私の事を好きでいてくれた友達。私。後輩がいた。先生がいた。両親がいた。私の高校生活は、とても幸せでした。三刀屋高校での沢山の出会いを心の支えにし、三刀屋高校卒業生としての誇りと高い志を持ち、これから新たな世界へと羽ばたいていこうと思えます。

最後になりましたが、私達に関わって下さったすべての皆様に改めてお礼を申し上げますとともに、大好きな三刀屋高校の益々の発展をお祈りして、答辞といたします。

## 【未来創造探究Ⅱ】

三刀屋高校では、地域の課題を知り改善にむけた提案を行う「未来創造探究」を行っています。一年生は、二月六日、地域の方々に自分の興味・関心について話す活動を通して地域や社会の課題と自分の興味・関心との接点を考える「トークフォークダンス」を行いました。

生徒たちはあらかじめ準備した自分の興味・関心に関するキーワードを四つ示して説明し、地域の方々から質問やアドバイスを頂きました。初対面の方との会話に最初は緊張した面持ちだった生徒たちも、地域の方々の和やかな雰囲気徐々に打ち解け、楽しそうに会話を弾ませていま



トークフォークダンス (1年生)



学年発表 (2年生)

### 2年生 学年発表テーマ一覧

- ◆英語を話す楽しさを知り、話せるようになるにはどうすればよいか  
周藤 茉鈴・木村 花蓮
- ◆若者の結婚式離れは食い止められるか  
毛利 涼花・周藤 涼香・名原 結花
- ◆若い世代に雲南市独自の魅力を伝えるには  
錦織 歩香・坂本 鮎香・周藤 空・山川 琉我
- ◆人がAIに支配されずに人とAIが共生するには  
上村 菜々子・日野 拓海・恩田 有里・武田 大輝
- ◆訪問看護の良さを高齢者の方に知ってもらうにはどう発信したらよいか  
永見 あいか・須山 希美・飯塚 さくら・恩田 玲美・川角 涼夏
- ◆伝統文化のある町とない町の違いは何か  
若者に伝統文化を知ってもらうことは可能か  
駿馬 香穂・内田 有菜・小田 瑞貴

## 【総合学科発表会】

二月七日、島根県内の総合学科の高校で行われている探究活動の成果を発表する「総合学科研究発表会」が行われ、一年生の勝部瑠奈さん、芝原春菜さん、坪倉茜さんの「雲南在住の外国人の困りごとから考える外国人にやさしいまちとは」が優秀賞を受賞しました。また、二年生の永見あいかさん、須山希美さん、飯塚さくらさん、恩田玲美さん、川角涼夏さんは「訪問看護の良さを高齢者の方に知ってもらうにはどう発信したらよいか」という発表を行いました。

この研究発表会がコンペティション形式で開催されるのは初めてでしたが、各学校が特色を活かした内容を発表しました。



## 【マイプロジェクトアワード2018】

二月九日・十日、NPO法人カタリバが主催する全国高校生マイプロジェクトアワード2018島根県大会が行われ、高校生たちが地域や社会の課題に対して自分自身の関心に基づいて実行したプロジェクトを発表しました。

三刀屋高校からは個人部門に4組、学校部門に4組のプロジェクトが参加し、二年生の小田瑞貴君と一年生の堀江柁介君のペアが島根県大会の代表として全国大会に出場するプロジェクトに選ばれました。

二人は「WAKAG A E R Iプロジェクト」と題して、地域の伝統芸能である神楽をもっと若い人達に知ってもらうという取り組みを行いました。

